２０２４年１２月１５日降臨節第３主日説教

ゼファニヤ書３章１４－２０節
フィリピの信徒への手紙４章４－７節
ルカによる福音書３章７－１８節

降臨節第３主日となりました。アドベントの中でも、喜びの主日とも呼ばれる主日です。その主日に合わせて、旧約も使徒書も、喜びがテーマのような個所が選ばれています。旧約日課のゼファニヤ書は、「**娘シオンよ、喜び歌え。イスラエルよ、喜びの声を上げよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び祝え**」（ゼファ３：14）で始まります。翻訳では漢字「喜」が三回入っていますが、それぞれ元の言葉が異なります。「叫ぶように喜ぶ」、「明るく喜ぶ」、「大いに喜ぶ」というような感覚で、それぞれ喜びの表現方法が異なる三つの言葉が用いられています。とにかく、いろいろな形で喜びなさいと促しているのです。

ここでは「喜びなさい」と命じているゼファニヤ書ですが、全体としては、主の怒りの日や、諸国民の滅亡など、少々恐ろしい神様の怒りを語っています。それら罪に対する裁きがあり、最終的に残った人々が主なる神様に（立ち返って）仕えるからこそ、ユダの復興、具体的にはエルサレムの罪が贖われると語り、喜べと命じています。本日の箇所はその最後の部分です。

使徒書は、先週に続き、フィリピの信徒への手紙です。パウロが獄中で書いたと思われますので（フィリピ１：13）、獄中書間と呼ばれますが、喜びが主題ですので「喜びの手紙」とも呼ばれています。本日の個所も「**主にあっていつも喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい**」（フィリピ４：4）とある通りに、喜びが前面に出ています。パウロは獄中にあるのですが、フィリピの人々が福音にあずかり、しっかりと教会生活を重ね、パウロのためにも祈ってくれているから、パウロ自身も喜び、そしてフィリピの人々も喜びなさいと語っているのです。

また、詩編は、新しい改正祈祷書版の聖書日課を採用していますので、それまでの詩編８５編から、イザヤ書１２章２－６節になりました。そこでも「喜び」が強調されており、「歓喜するような喜び」（３節）、「歌い叫ぶような喜び」（６節）が記されています。

さて、それらと比較しますと、本日の福音書は、喜びという言葉がありません。ルカ福音書にある洗礼者ヨハネの物語です。その理由は、降臨節第３主日は、洗礼者ヨハネについて学ぶ主日でもあるからです。

洗礼者ヨハネの描き方は、四つの福音書によって異なりますが、ルカ福音書は、誕生の時からイエス様と関係があるように描き（ルカ１章）、先週の箇所では、洗礼者ヨハネの活動開始が、いつ頃の出来事であったかを歴史的に位置付けていました。本日の箇所では、洗礼者ヨハネが具体的にどのような活動をしていたかの一端を示しています。マルコ福音書などでは「**洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた**」（マルコ１：4）と簡潔に表現され、マタイ福音書では、ファリサイ派やサドカイ派の人々に対する、洗礼者ヨハネの一方的な批判が中心ですが（「まむし・蝮の子らよ」という有名な批判の言葉がここにあります）、ルカ福音書では、「群衆」、「徴税人」、「兵士」

とのやり取りを示し、悔い改めの内容を具体的に示しています（「まむし・蝮の子らよ」という有名な批判の言葉はルカにもありますが、新しい訳ではマタイもルカも「毒蛇の子らよ」となりました。イスラエルにはまむし・蝮は生息していないからです)。

このように悔い改めの内容をより具体的に示すのは、ルカ福音書の神学的特徴です。それは「福音」を受け入れる準備として、悔い改めを求めているということです。実際、洗礼者ヨハネがイエス様の活動と呼応して、そのような悔い改めの洗礼を行っていたかどうかは分かりませんが、すくなくともルカ福音書はそのように洗礼者ヨハネの活動を位置付けています。

このような洗礼者ヨハネの位置づけと悔い改めの強調、ことに救いの条件であるかの悔い改めの強調は、排他的な宗教観の形成のように思えます。また、悔い改めを求め、罪の赦しを与える教会の権威を示し、誤った教会の権威主義的な傾向形成の根拠のようにも思えます。しかし、ルカ福音書が描こうとしている悔い改めの強調は、そのようなことではありません。悔い改めは求めますが、逆に、誰でも、どのような罪を犯してしまったとしても、主なる神様に対してその罪を告白したら許され、福音の告知を受け入れるならば、その救いに与り、まことの喜びを味わうことができると宣言しているのです。なぜならば、罪をゆるし喜びへと導くのは、人間ではなく、主なる神様であるからです。洗礼者ヨハネは、悔い改めのみを求めたといえますが、その目的は、本日の福音書の最後に「**ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた**」(ルカ 3 : 18) とある通り、福音の告知であるからです。

ヨハネの告知する福音は、イエス様が登場するということであり、福音の内容自身は、イエス様のご生涯とその十字架の死と復活によって示されます。ことに、死が終わりではないということです。復活を信じることと不可分です。なぜならば、この世界の生がすべてではないからこそ、まことに悔い改めることが可能であり、またその悔い改めを主なる神様が受け入れられたと信じることも可能となるからです。

この世界で起こってしまった様々な罪、それが個人的なことであれ、また戦争や紛争のような大規模なことであれ、この世界がすべてであるという制限の中で、その解決を求めようとするならば、なかなか、真の和解も平和の実現も困難であると思います。もちろん、何が行われたのかを明らかにすることは大切です。しかし、それだけに終始し、あるいはそのことを自分が納得するように明らかにしなければと思う限り、ましてや報いが具体化しなければと思う限り和解も平和もないと思い続ける限り、世界に平和は訪れないと思います。しかし、イエス様は、それを超える和解の道を、真の喜びに至る道を開いてくださったのです。

わたしたちは、今年も、クリスマスで、この悔い改めを通した福音の受け入れるによる救いの喜びを改めて味わいます。それは本来、キリストの教会である限り、教会のどの礼拝でも示され、また感じ取ることができることです。しかし、クリスマスは、その喜びが世界に誕生したこと、改めて自覚します。クリスマスを祝い喜ぶことは、この世界に希望があることを信じ続けることです。それゆえ、クリスマスの喜びが、まことの世界平和の喜びとなることを信じながら、クリスマスをご一緒に祝いたいと思います。